

2022 年度

修士論文要旨

(演習科目 精神分析学研究演習)

(指導教員 大橋良枝教授)

前向きに働く牧会者の、
牧会上の困難からの立ち直りのプロセス
—困難体験が牧会に与えた影響を中心に—

聖学院大学大学院

心理福祉学研究科

心理福祉学専攻 (修士課程)

学籍番号 121MS003 佐藤 愛

我が国では、牧師や伝道師といった牧会者が心身共に疲弊して、離職や辞職を余儀なくされるケースが多いことが指摘されている。しかしながら、他の対人援助職で研究されているような疲弊から回復へのプロセスについての心理学的な探索的研究は、我が国の牧会者を対象としては行われていない。本研究は、日本のプロテスタント教会に仕えている牧会者の体験にもとづき、現在前向きに働いている牧会者が、牧会上の困難を経験しつつもそこから立ち直っていくプロセスを明らかにすることを目的として行った。

本研究の対象者は、現在日本のプロテスタント教会で牧会している（牧師・伝道師としてその務めを果たしている）牧会者のうち、これまでの働きの中で困難体験を経ながらも、現在前向きに教会に仕えている者とした。予備調査としてバーンアウト尺度である MBI を衣笠（2009）が牧師用に作成した内容を使用した 4 件法のアンケートを実施した後、8 名にインタビューを依頼し改めて承諾を得た。分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach : M-GTA）を採用した。M-GTA を分析方法に用いるにあたり、まず分析に用いるデータの範囲の設定を行った。8 名のインタビュー対象者全てが牧会における困難体験と、現在のように前向きに牧会ができるようになるまでの過程について語っていた。したがって、本研究では 8 名全員の逐語データを分析に用いることとした。次に、分析テーマ、分析焦点者の設定を行った。分析テーマは「前向きに働く牧会者の、牧会上の困難からの立ち直りのプロセス」とした。分析焦点者は「牧会の中での困難体験を持ちつつも、現在前向きに教会に仕えている牧会者」とした。なお、牧会者は「現在もプロテスタント教会で牧会をしている牧会者」に限定した。

分析の結果、前向きに働く牧会者の、牧会上の困難からの立ち直りのプロセスは、次の 5 つの部分から構成された。まず〔ネガティブ思考の発現〕は、牧会者が牧会をする上で生じた困難を自覚する概念からなる。これに、〔現実への問い〕が起こり、そこから〔足だまりへの気づき〕が続き、〔祈りの答え〕を得て、困難から立ち直った姿である〔真の牧会者としての目覚め〕に至った。すなわち、牧会者が自己の弱さを目の当たりにするような現実の中で、神が牧会者をご自身の救済計画のために召し出したことへの神秘や不可思議さを抱きつつ、神へ祈り、人々の助けや学びの原点を通して神への信頼を取り戻す心理的成長のプロセスといえるものであった。神への信頼を支柱とすることが、牧会者自身が「前向きに」働いていると自負できる状態であり、牧会者は自分自身の視点で自己を見つめるだけではなく、神の視座から自分と世界を捉えることを点検作業し、出来事を有意味化していくことが、牧会者としての成長を促すことにつながるということが明らかになった。また、

牧会者の召命感は目に見える形で証明されるものではないため、神への祈りを通じた問いかけと共に恩師や信徒、牧師仲間など信仰を同じくする者からの励ましや扶助といった、周囲の守り手の存在が必要であることが分かった。したがって、牧会現場に出てからは、この「足だまり」のつながりに目を向け、他の牧会者や信徒とのつながりの中で牧会するという意識を持つことが、牧会者個人のストレス耐性を養うこととなるといえる。ネガティブな状況から立ち直るにあたり、個人のストレス特性ではなくプロセスを辿る中で回復の道筋を獲得していくという視点は、牧会者のみならず他の疲弊状態にある人々にとっても重要であるといえる。とりわけ、牧会者のように教務を託された、重荷を担いやすい立場の人にとって、その使命を継続するために自分自身の弱さと限界を悟ることが癒しと成長の始まりでもあることを、本研究結果は提示している。

牧会者自身がプロセスの中で培われる能力として、ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability)が挙げられる。結果で示されたプロセスは、ネガティブな状況の中で早急に答えを求めず忍耐と祈りの中で持ちこたえ、真の牧会者としての洗練された喜びを獲得することへと至っており、牧会者はこの過程の中でネガティブ・ケイパビリティへと導かれ発揮したと考えられる。さらに言えば、ネガティブ・ケイパビリティは、牧師のもとに助けを求めてやってきた人の話に耳を傾ける上での理想的態度である。

本研究の限界と課題として、対象者が日本基督教団という一教派の牧師に限定されていること、また現在女性教職が増えているにも関わらずインタビュー対象者の内女性は1名のみといった偏りが挙げられる。今後は広く多教派の牧会者を対象者とするなどさらなる探求が必要となる。